

さまざまな形で戦争を体験した12人の方々の

お話を聞いて、学生たちは何を感じ、考え、

そしてどのように戦争というものを受け止めたのでしょうか。

インタビューを終えて、16人の皆さんに感想を寄せてもらいました。

今回のインタビューを通して、戦争体験は一人ひとりの人生が違うように本当に一つとして同じものはない、ということを感じました。学校の平和学習では平和の大切さを知ってもらうために戦争の悲惨な部分が多く語られますが、当時の日本では戦争をすることが当たり前で、多くの日本人はさまざまな苦勞をいとわず国民一丸となって戦わなければならないと考えていたことを初めて伺い、知ることができました。

戦後70年が経ち、日本は当たり前のように平和な社会を実現しました。しかし今の平和を更に100年、200年先まで守り続け、二度と戦争をしないためには、平和の大切さのみならず、その昔、国民全体で戦争に突き進んでしまった歴史的背景などについても、もっと学び、深く考えなければならないと強く感じました。

佐藤宝さん
戦争の歴史的背景をもっと学び、考えたい



私たちが伝えていかなければいけないこと

千保木蘭さん

戦争体験をした方々の話を聞いて、現代は戦争の犠牲者の上に成り立っている世界だと真っ先に思いました。「戦時中の政府」が本来の形ではないと、政府も国民も学んだからこそ、現代の政府の形があるのだと思います。彼らは、国民のことを全く考えておらず、彼らの利益や見栄のために、国民を翻弄していたことを学んだのです。

私がこう思ったのは、防空壕を各家庭で作っていたエピソードを聞いたからです。私にとってこのことはとても衝撃的でした。なぜなら、家庭の所得格差によって、防空壕の規模や性能に違いが生まれてしまうからです。政府はこの違いに対しても何もしなかったことから、国民の一人ひとりの命を軽視していたという印象を受けました。

政府間の争いに、国民が巻き込まれ、被害を受けて、支援もない状況が過去にあって、それは間違った形の社会であるということを、インタビューした私たちが伝えていかなければならないと思います。



今も戦争という歴史は身の回りに埋もれている

保科彰斗さん

戦争体験者から話を伺う機会を通じて私は、戦争をより身近に感じることができました。学校や本で学べる過去の歴史というのは、教科書上の文字の羅列を目で追い、ただ覚えるだけであり、戦争を実際に体験していない私には、それをあたかも体験したかのように想像するのは極めて困難でした。その上、過去に存在した価値観や文化観は、あまりにも理解しがたい点が多くありました。

しかし、体験者である佐々木さんと石川さんからは、授業で学ぶのとは全く異なり、具体的かつ率直にその当時のことについて話を聞くことができ、戦争について白紙だった私の頭の中に、知識だけではなくその時の背景を想像できる絵が描き出されました。

また、戦争の被害を受けた地域や佐々木さんが育った地域が私の家にとっても近く、話の中で知っている名前がいくつかあがり、それらの場所が当時はどんな被害を受けていたのかを知りました。今まで自分は戦争にあまり縁がないと考えていましたが、実は今も身の回りにその歴史が埋もれていると考えたら、戦争というモノがとても身近に感じられるようになりました。

今回の聞き取りでは、より戦争を深く考えるための鍵を得ることができました。これを活かして、より体験者に近い形で戦争について学び、考えを深め、その後それらを使うこれからの社会に繋げていくことも同時に考えていきたいです。



戦時中にもあった小さな幸せ

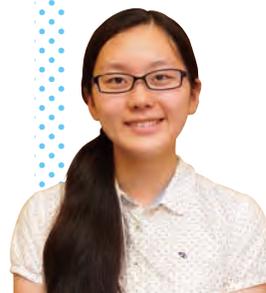
秋山裕香さん

私は戦争体験者の方にとって、その時の思い出はつらいばかりだと考えていました。しかし今回お二人は、笑いを交えながら話してくださる姿が印象的でした。戦火をくぐり抜けたその方々にとって、戦時中、そして戦後起こったこと全てが嫌な思い出なのではなく、その中で生活していたからこそ楽しかったことや、幸せもあったのだなと思いました。

戦争という混乱の中で、人々は小さな幸せや楽しみを見つけていたのだと知ると、「あんなにもよい戦争があったから人々もつらい思い出ばかりだろう」と安直に考えていた自分が恥ずかしくなりました。

しかしその一方で、悲しい思い出の方は聞いていて胸が痛くなるようなものばかりでした。生死を分けた瞬間に関する話もありました。ある行動をとらなかったらその方は生きていなかったという話です。その中には、周りの人に流されていたら死んでいた、というような状況もありました。もし私がその立場だったら周りの人に流されて死んでいたでしょう。自分の意志を持つことの大切さが分かりました。

最後になりましたが、今回のインタビューに関わったすべての方に御礼申し上げます。貴重な経験となりました。ありがとうございました。



今の日本に生まれたことに感謝

荒木裕一さん

戦争体験者の話を直接聞いてまず思ったことは、当時の日本はおかしかったということでした。当時の日本は戦争を肯定していて、否定すると「非国民」といじめられ、捕まることもあったと聞き、今の日本ではありえないことが当時は起きていたのだと思いました。

今回戦争体験者に話を聞くことができたのは、今の日本が戦争を否定し、もう二度と繰り返さないと決めているからだだと思います。私は今の日本に生まれたことに感謝し、戦争を否定している人の努力が無駄にならないよう行動していかなければいけないと思いました。



誰のための戦争か 誰のための平和か考えたい

やまざき・あかり
山崎朱莉さん



私は二人の戦争体験者の方へのインタビューを通して、私たちが抱える平和への責任を強く感じました。お二方とも男性だったのですが、小さい時から軍隊に対して憧れを抱いていたと言います。誰のための戦争なのか。当時の国民なら全員が国のためだと表面では言うでしょう。でも、私は話している時に見せた浜野さんの表情が忘れられません。浜野さん自身は戦争で戦ったことはないようですが、時々何かを思い出しては涙が出るのをこらえていました。終戦から70年経った今でも、戦争のせいで涙を流す人がいます。死人が沢山出るといことは、殺人者も沢山いるということですね。人を殺して何のためになるのでしょうか。私は当時を生き延びた人に直接話を聞くことで改めてこの気持ちが湧き上がりました。

現在の平和はこれからの未来の平和を意味します。誰のための平和か。一人ひとりが考えられる社会にしていきたいです。

戦争体験者の方々の話を聴き、当時の様子や暮らしなど教科書では学ぶことのできない現実を知り、戦争の悲惨さがすくく伝わってきて、今の自分がいかに幸せかを感じました。戦争、核兵器は自分の大切なものを何もかも奪っていき、生きるということが苦になってくると思いました。今は不自由なくおいしいものを食べることができそうですが、当時はそれも難しく、食事をするのも精一杯であったということを知り、自分は感謝の気持ちをもちながら生活していくべきだと実感しました。

また、戦争のもたらす残酷さを知り、それと同時に平和の尊さを学ぶことができ、今の平和が続くにはどうするべきかと考えさせられました。ここで学んだことをいろんな方に伝えていけるように、自分ができることをしていきたいです。

教科書では学べない 現実を知った

わらいがい・ゆい
藁谷結さん



人それぞれ違う戦争体験、 得たもの、失ったもの

あだち・まゆこ
足立真優子さん



戦後70年を迎え、戦争体験者と呼ばれる方々が少なくなってきた今、次の時代を生きる私たちが戦争という過去の事実に対し何ができるのかを考えた時、今回このような機会を通して直接戦争体験者の方の話が聴けたことは、とても貴重な経験でした。私自身、高校時代に港区平和青年団の一員として活動させていただく機会があり、戦争に関してはその活動を通して人並み以上に学んだつもりでした。しかし、ただ一口に戦争体験と言っても、どこで、どのように、どんな立場で戦争を体験したかによって、感じたもの、得たもの、失ったものは違い、戦争に対して、人それぞれに異なる価値観、考え方がありました。

私たちは過去に戻り戦争を体験することはできません。しかし話をよく聴き、伝えていくことはできます。今回、このような機会を与えていただけたことに感謝しつつ、この経験を無駄にしないように、今後もさまざまなアプローチで活動していきたいと思っています。

現実には想像をはるかに上回る 苦痛と悲劇だった

いけがみ・さえ
池上沙衣さん



戦争、と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。私の場合、第二次世界大戦の東京大空襲で防災頭巾をかぶった人々が火の海の中を逃げ惑う一面面です。なぜ見たことも経験したことのないこの情景を想像できるのかといえば、それは小・中学校の道徳や社会科の授業でそのシーンを含んだアニメを何度も見てきたからです。しかし、現実には想像をはるかに上回る苦痛と悲劇だったのです。

今回の戦争体験者の方々の話から、戦争でつらい思いをした日本人は国内だけではなく、戦時中朝鮮半島へ渡り、そこで暮らしていた日本人は戦況が悪化すると命からがらソ連軍の手から逃れようとしていました。食べ物も十分にありませんでした。一方、日本で軍事訓練や軍需工場の仕事に専念していた人々にとっても飢えは深刻な問題でした。

そんな戦争から70年経った今、私たちに語り継がれた戦争体験。この冊子には体験者たちの「二度と戦争を起こして同じ思いをしてくれない」という次世代の私たちへの強いメッセージが込められています。

戦争体験者の 強い思いを大切にしたい

いん・しゅんかく
任俊赫さん



「戦争体験者へのインタビュー」に臨むことになった時は、非常に緊張しました。平和な21世紀しか知らない僕らが、どこまで相手に寄り添って話を聞くことができるか不安だったからです。インタビューの講座や事前の資料で学ぶのと、ご本人と対面するのでは、違う気がしましたが、今回のインタビューではその違いが良い方に働いたように思えました。

インタビューは不慣れな私たちでしたが、どの方に対しても、疑問に思ったことやより詳しく伺いたいことを聞くだけで、インタビュアーとしての役割を全うすることができました。ではなぜ私たちにとってこんなに容易だったのでしょうか。それは、戦争体験者の方々に、私たち若者に直接「伝えたい、残したい」という強い思いがあったからではないかと思います。話す内容は各々で全く違いましたが、体験者の方々の思いはみんな同じでした。その強い思いの詰まった話を、戦争体験かどうかは抜きにしても、大切にしたいと思いました。

戦争に対する恐怖と悲しみを 生々しく感じた

ささき・りょう
佐々木嶺さん



今回、私はお二人の戦争体験者の話を聞く機会がありました。一人は実際に戦争に行き、戦地で戦った方。もう一人は、戦争中に学生時代を過ごされた方です。このお二人から聞いた話は生々しく、戦争に対して恐怖と悲しみを感じるのに十分すぎる内容でした。

それらの話を実際に聞いてみて、私は感じたことがあります。それは、戦争体験者の方々は想像以上に、戦争体験に対して悲観的な記憶は持っておらず、恐怖を感じていない、むしろ戦争体験に対して誇りを持っているのではないかと感じました。私は実際に戦争を体験したことがありません。つまり、戦争に関して私が持っているイメージは想像上のものでしかありません。私の持つ戦争体験者に対するイメージは、「つらい体験をした方々」というものでした。しかし今回のインタビュー体験によって、自分の考えは相手を敬っているのではなく、むしろ失礼な考えだったのかも知れない、ということに気付くことができました。

平和に慣れている 今だからこそ、できること



しらつか・みか
白塚美歌さん

私は今回、初めて戦争体験者からの聴き取りをしました。母の出身地である長崎に祖父が住んでいるということもあり、幼い頃から戦争、特に原爆のことは知っていましたし、原爆資料館などでどんなに悲惨なものだったのかも見てきました。「戦争は二度と起こってはならない」「つらく、悲惨なこと」。聴き取りの前の私の、戦争に対する思いはこのようなどても漠然としたものでした。しかし、実際に聴き取りをしてみると、決してつらい経験をした人だけでなく、一人ひとり全く違う経験をしていることがわかりました。

聴き取りを終えて思うことは、今平和に暮らせる私たちは本当に幸せだということです。平和慣れしてしまっている今だからこそ、このような機会を頂いた私たち大学生が周りに発信すること、次の世代に伝えていくことなど、できることをやってみようと思います。

今回、インタビューをさせていただいて一番に思うことは、やはり戦争に対する考え方が変わった、ということでした。学校の授業などで習う戦争は、私にとって歴史の一部でした。それが私の人生に何かしらの影響を与えても思っていませんでした。教訓として戦争はいけないものだ、怖いものだというイメージでしか捉えていなかったと思います。

インタビューをやってみて、実際に戦争を体験した方々に会い、教科書に載っている事柄を「自身の経験としてお話しされる姿」を見て、自分の中の戦争という遠いイメージとのギャップに戸惑いました。また、同時に、「本当にあったことなんだ」と、私の中で戦争というものが歴史上の出来事から日々ニュースでやっているような身近な出来事へと変わり、あまりの残酷さ、非情さに恐ろしさを覚えました。

身近な出来事のように 感じられた



たかはし・まりな
高橋麻里奈さん

この経験を通して強く感じたことは、戦争の事実を風化させていってはならないということでした。インタビューした方々も、風化してしまふことで繰り返される戦争が、最も恐ろしいとおっしゃっていました。戦争をただの昔のこととせず、日々心の片隅でもよいから記憶として残しておくことが、今の私たちができる最も簡単な大切な、戦争を無くす努力なのではないかと思えます。

戦争とは死の恐怖と隣り合わせの 毎日だった



なかむら・みつたか
中村充孝さん

私は大学の夏休みの期間に、浜野豊吉さんと岩垂広子さんのお二人に戦争体験について伺いました。インタビューを振り返ってまず思うことは、「戦争体験」と一口に言っても、それは一人ひとり全く異なる体験である、ということです。浜野さんは「軍人として」戦争を体験されたのに対し、岩垂さんは「母親として」戦争を体験されました。平成生まれの私には「戦争」と聞くと、国と国とが戦火を交えるといった抽象的なイメージが先に浮かんでしまいますが、今回お二人の話を伺って、実際に当時を生き抜かれた方々にとつての「戦争」は、いつ自分が死ぬかわからない恐怖と隣り合わせの毎日、明日をどう生きるかといった生身の人間の暮らしそのものだ、ということがわかりました。こうした具体的な戦争体験は、私たち若い世代がこれからの平和な社会を築いていくか考える際にその根幹となるものだと思います。

今回話を伺った経験を糧に、今後は、私が次の世代に戦争の悲惨さと平和の尊さを伝える活動をしていきたいです。

今も大切な、自分の意志と 正しい情報の選択



すどう・やすお
須藤康夫さん

私は今回のインタビューの中でも、体験者の方の「自分の意志で正しい情報を選び取った上で、時代やその場の環境に適合する必要がある」という一言が特に印象に残りました。戦時中から戦後へと、大きな変化と過酷な状況を経験された人の話を聞いた後だからこそ、よりいっそうこの言葉が重みをもって響きました。これは戦時中に限ったことではなく、めまぐるしく変化を続ける現代においても、同じことが言えるはずで。私自身、自分で考えて情報を取捨選択し、自分の意志で行動するというのを、これまで以上に心がけたいと思いました。

平和のイメージを 確固たるものにするために



ほりうち・ふみたか
堀内史誉さん

私は普段生活をしていて、平和について深く考えたことはありませんでした。それは私が、不自由なく十分な生活を送っていたからです。

今回、戦争を体験した方の話を聞いて、今の世代の人と戦争への認識が違うように感じました。戦争反対という認識は共通ですが、平和に対する思いが私のように抽象的でふわふわしたものでなく、平和とはこのようなこと、という確固たるものがあるように感じました。それは戦時中に平和でない暮らしをしていて、もっと食べたい、遊びたい、オシャレしたいなど、平和への思いを描いていたからこそ、相違点が生じるのではと思います。

今回の聴き取りを後世に伝えていくことに対し、私たちは深く考える必要があります。これから伝えていく情報は二次情報になるため、体験者の方と私たちでは多少なりとも、温度差や話に矛盾が生まれるからです。私は聴き取りの際に感じた空気感を大切に、後世に伝えられたらと思います。

インタビューを
終えて

30周年事業の主な内容

1 記念作品

展示会場

みなと区民まつり・東京プリンスホテルエリア内「平和の広場」
 平成27年10月10日・11日
 港区役所1階ロビー
 平成27年10月13日〜23日

平成27(2015)年度の活動について

港区では、昭和60(1985)年8月15日、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を願い、港区平和都市宣言を行いました。そして、宣言から30年の節目である平成27年度に、『幅広い世代の区民が「平和」を考えるきっかけをもち、世界の平和を願う心は一つであることを改めて認識すること』という理念を掲げ、さまざまな事業を実施しました。

おづる 折り鶴による モザイク アート



制作:
区内の保育園・幼稚園児及び区民等

区内の保育園・幼稚園の園児が制作した折り鶴のほか、広く呼びかけて集まった折り鶴を、みなと区民まつりの来場者の協力のもと、モザイクアートを完成させました。

ペットボトル キャップの 看板



制作:
区立小学校児童

ペットボトルキャップを使って、みなと区民まつり「平和の広場」のメイン看板、「港区平和都市宣言30周年 Declaration as a City of Peace since 1985 Minato City」を制作しました。

平和ポスター・作文

平和ポスター・作文コンテストを開催し、応募作品全てをみなと区民まつりの会場に展示したほか、優秀作には賞状を授与しました。受賞者は次のとおりです。

募集対象:
区内中学校生徒

平和ポスター

金賞



「この日常を ずっと。」
松野 にこ さん (区立御成門中学校 2年)

銅賞

「未来のために平和を守ろう」
板橋 葵 さん (区立御成門中学校 1年)

「平和に関するポスター」
坂本 康太 さん (区立白金の丘中学校 7年)

「みんなえがおに みんなしあわせに」
鈴木 健太 さん (区立高陵中学校 1年)

「全てが望む平和」
元嶋 仁奈 さん (区立六本木中学校 3年)

「幸せの種」
渡邊 こと乃 さん (区立御成門中学校 2年)

銀賞



「永遠の願い」
神作 拳真 さん (区立高松中学校 2年)



「PEACE 地球は一つ」
真崎 大哉 さん (区立高陵中学校 3年)



「戦争を忘れない」
溝端 志歩 さん (区立高松中学校 2年)

一秒の奇跡

「あなたは、奇跡の子なのよ。」
それが母の口癖です。八人兄弟の末っ子として産まれた私は、両親と七人の兄妹から毎日、「可愛い、可愛い。」

という言葉のシャワーを浴びて育ちました。決して裕福ではありませんでしたが、愛情溢れる、幸せな家庭です。

しかし、私が六歳の頃、母から衝撃的な告白を受けました。

「あなたを産むかどうかが、一秒だけ迷ってしまった。」

とのことでした。私は「たった一秒だけ?」と思いました。母は私を産んでからも、そのことをずっと後悔しているそうです。

当時、兄妹たちにはまだ学生が多かった為、経済的な余裕もなく、また母は、四十三歳というリスクの高い高齢出産でした。もしも、その一秒悩んだ答えが、今出ている答えでは

なかったら…。その時やっと、母の口癖の意味が分かりました。この世界に誕生したことが奇跡であり、これ以上ない幸せなことなのです。そう考えると、今の私の楽しい中学校生活は、奇跡の連続によって叶っているのだと気づかされました。

その奇跡の命を、世界中では「戦争」と称して奪いあっています。日本も七十年前までは、第二次世界大戦に参戦していました。果たしてそこで手に入れたものは、命の重みに勝っていたのでしょうか。

私の祖父は、当時二十歳で徴兵され、九州の山奥に配属されました。ある時、同期の一人が窓から身を乗りだして

「アメリカの飛行機が飛んでいるぞ!」

と言った途端、何発もの弾丸を浴びて即死しました。祖父は危機一髪のところ助かったものの、同期の突然の死に、相当なショック

をうけたそうです。無事に帰ってきた祖父は、

祖母と結婚し、私の母を授かりました。きっと、亡くなられた同期の方にも、受け継がれる命があったはず。もし、あの時、撃たれていたのが祖父だったら、私は今ここに居ませんでした。生命とは、全てが繋がって出来ているのです。

たくさん命を奪い合うことで、利益を得ている人がいます。上辺だけの利益で、心を満たすことは出来るのでしょうか。平和に繋がっているのでしょうか。一生、後悔の念が心を支配しては、生きる喜びはどこにも生まれ育ちません。私は、それなら、皆で手を取り合い、支えあうことで生まれる「生きる喜び」を利益に変えて生きたいです。

現在の日本は、日本国憲法第九条により戦争の放棄が構成されています。三大原則の一つである平和主義が規定されているだけで、私達はつい平和だと思ってしまうのです。しかし、戦争は放棄していても、心の争いは日々絶えません。受け入れ難い残酷なニュースも、止むことを知りません。何干、何万という尊

い奇跡の命が、奪われているのです。

「世界平和」というと「自分とは違う次元の話だ。」と錯覚してしまいます。しかしそれは、紛れもなく地球上で起きていることであり、決して自分に関係無いことではありません。

平和な世界を創る為に、私達が出来ることが何なのでしょう。私は、辛い過去や、厳しい現実から目を背けないことだと思います。学校での役割をきちんと果たしたり、一日に一度は家族に笑顔を見せる等、些細なことが大切なのです。こうして、自分自身が「平和な存在」になることが、世界平和への第一歩になると思います。

私は将来、世界各地を飛びまわって、多くの人々と対話することが夢です。そして、お互いの文化を伝え合い、認め合って、いつか戦争の無い世の中にしたいです。その為に、中学生である今から語学を勉強し、

「みんなは、奇跡の子なんだよ。」

と、母の口癖を受け継いでいこうと思います。そして、一つ一つの小さな平和を、繋ぎ合わせられるような存在になりたいです。

銅賞

- 「七十年の想いを繋いで」 岡田 菜美子 さん（区立港南中学校 2年）
- 「平和のために私ができること」 後藤 七海 さん（区立港南中学校 3年）
- 「手帳が語る真実」 小原 里咲 さん（区立三田中学校 3年）
- 「平和と違いの見方」 高橋 舞夢 さん（区立港南中学校 3年）
- 「戦後70年、伝承の難しさ」 村瀬 理桜 さん（区立三田中学校 2年）

銀賞

- 「平和な空」 内田 菜々美 さん（区立港南中学校 3年）
- 「生きていてくれてありがとう」 小鹿 美春 さん（区立高松中学校 3年）
- 「私の平和宣言」 渡具知 涼央 さん（区立高松中学校 3年）

2 記念イベント

平成27年10月10日～12日

港区の芝公園一帯で開催された「みなと区民まつり」において、各種イベントを開催しました。
企画・運営は、区内の大学生9人によるイベント実行委員が中心となって行いました。



記念ステージイベント

みなと区民まつり「平和の広場」において、平和をテーマとした9つのステージプログラムを、イベント実行委員が企画・運営しました。実行委員とアフガニスタン・イスラム共和国大使館大使・外交官とのパネルディスカッションや、難民についての講演会、映画上映、コンサートなど幅広い内容のステージイベントを開催し、世界平和への願いを来場者に伝えました。



平和クイズスタンプラリー

来場者に平和について考えてもらうきっかけとするため、みなと区民まつり5エリア全てに1か所ずつ、平和にまつわるクイズを用意し、スタンプラリーを実施しました。



イベント実行委員 主な活動内容

- ・ 記念作品「折り鶴によるモザイクアート」のデザイン作成
- ・ 記念イベントの企画・運営と事前研修
- ・ 記念冊子・映像記録作成のための戦争体験者への聴き取り



伝える・つなげるプロジェクト

みなと区民まつり来場者の思いを書き集めた「平和のタスキ」・「未来のタスキ」を、公募で選ばれた8人の参加者が、「ごみ拾いウォーク」としてみなと区民スポーツ・体育祭当日（10月12日）にごみを拾いながらスポーツセンター会場まで運びました。その後タスキは港区スポーツセンターで展示しました。このプロジェクトは、NPO法人との連携により実施しました。

3 記念冊子・映像記録

戦争体験者の体験談を、「インタビュー」「手記」の二つの形で掲載した記念冊子を作成しました。インタビューでは、港区平和青年団の高校生と、イベント実行委員の大学生がインタビューを務め、若者にも読みやすい内容に編集しました。また、戦争当時の基礎知識や港区の様子を学べるよう、資料写真を多く掲載した特集ページも収録しています。
さらに、インタビューの様子や、現在の若者の平和の思い等を収録した映像記録（DVD）も併せて作成しました。

4 港区平和都市宣言30周年記念式典

～平和を考える集い～
平成27年8月15日

記念式典及び港区平和青年団の活動報告会を開催しました。平和の灯に分火いただいた広島市・福岡県八女市・長崎市の各市長からのメッセージ紹介や、広島で被爆したピアノのミニコンサート、来場者全員での合唱など、平和を考えていただくきっかけとしてさまざまなプログラムを行いました。

5 非核平和イベント

平成28年1月29日

日本非核宣言自治体協議会と共催で、朗読劇等を実施しました。

6 横断幕・懸垂幕の掲示

通年

区役所や各地区総合支所に懸垂幕・横断幕「港区平和都市宣言30周年 心から平和の願いをこめて」を掲示しました。

毎年実施している各種平和事業

憲法週間記念講演と映画のつどい

（平成27年5月14日）

戦場カメラマンの渡部陽一氏を講師に招いた講演会と、映画に代えてミニパネル展（平成27年5月8日～14日）を実施しました。

平和展

（平成27年8月1日～16日）

平和の尊厳を伝えるため、区役所1階ロビー等区内5会場にて平和展を開催しました。明治から今日までの戦争を中心とした年表や、戦時中の食料の食品サンプル、国民服の複製品などのほか、区民の方から寄贈いただいた寄せ書きのある日章旗等、多数の

巡回平和メッセージ展

（平成27年10月～12月）

著名人による平和メッセージパネルを小学校に展示し、子どもたちに、平和の大切さを改めて考える機会を提供しました。

ミニ平和展セットの貸出し

戦時中の暮らしを再現した「衣・食・住」の啓発物品セットを用意し町会・自治会や地域など、子どもたちが集う場所での語り

平和青年団事業

次代を担う高校生世代を対象に、長崎への派遣研修を中心とした平和に関する研修を通して、平和を築く意識を醸成しています。平成27年度は、港区平和都市宣言30周年記念式典及び記念イベントへの参加や、記念冊子作成に伴う戦争体験聴き取りのインタビューを務めるなど、さまざまな取組をしました。

その他の取組

各図書館で実施する特設展示「平和を考えるコーナー」や港郷土資料館コーナー展「終戦70年―港区の戦中・戦後―」などを、「港区平和都市宣言30周年事業」の一環として実施しました。

あ

愛国婦人会……あいくわいじんかい 明治34

(1901)年に発足した、戦死者遺族や傷痍軍人に対する慈善活動を行う団体。昭和17(1942)年、大日本国防婦人会、大日本連合婦人会と統合して「大日本婦人会」になった。▼P.44

赤紙……あかがみ 「召集令状」を参照。

▼P.21

慰問袋……いもんぶくろ 出征兵士を慰めるため、地域の婦人会や学校単位で中に日用品や菓子、娯楽品、励ましの手紙などをに入れて送った。▼P.33

MP (Military Police) 米軍の警察

憲兵のこゝろ ▼P.135 「コラム20

憲兵隊

か

外地……がいち 終戦までの、本土以外の日本の領土を指す。朝鮮半島や台湾

など。

学徒出陣……がくとしゅうじん 昭和18

(1943)年12月、戦局の悪化により、大学・高等学校・専門学校(生徒)の徴兵猶予が停止され、主に文科系の学徒が軍隊に入隊したこと(理工系などは入隊が延期された。「神風特攻隊」員として命を落とした学生も多かった。▼P.24、P.103 「コラム12 徴兵猶予と学徒出陣」

学徒動員……がくとどういん 学生、生徒

を対象に行われた動員のこと。日中戦争以降徐々に拡大され、戦争末期には、授業が停止されてもっぱら軍需工場などへ動員された。「学徒出陣」を含めて「学徒動員」と呼ぶ場合もある。

学童疎開……がくとそかい 戦争末期

都市の国民学校の生徒を空襲の危険から避けるために強制的に農村部へ移動させたこと。東京からは約20万人が疎開した。しかし疎開先の食糧事情は

悪く、栄養失調やシラミに悩まされた。

親戚などを頼った縁故疎開と学校ぐるみの集団疎開とがある。▼P.37、P.40、P.155 「コラム21 疎開」

機銃掃射……きじゅうそうしゅしゃ 機関銃の

銃口を動かし敵をなぎ払うように射撃すること。空母に搭載された戦闘機からの機銃掃射を受けた例が多い。

教育勅語……きょういくせいのことば 明治23

(1890)年に天皇から国民にむけて発布された「教育一閑スル勅語」のこと。国民の守るべき道徳、基本精神として忠君愛国の精神を中心に説いたもの。終戦に至るまで、学校教育の支柱として子どもたちに教えられた。

強制疎開……きやうせいそかい 空襲、火

災などの被害を少なくするために、建造物や人などを、所有者や本人の意思を認めないで分散させること。▼P.94 「コラム10 強制疎開」

玉音放送……たまねはうそう 天皇(玉

が自らの声(玉音)で「終戦の詔書」を読み上げた放送のこと。昭和20(1945)年8月15日正午からラジオを通して国民に伝えられた。▼P.47、P.64 「コラム3 玉音放送」

玉碎……たまください 軍隊が全滅すること。

戦時下では消極的な表現を避けるために名譽や忠義を守って潔く死ぬという意味でこの語が使われた。昭和18(1943)年5月にアッツ島で日本軍が全滅して以来、軍部は全滅を玉碎と呼ぶようになった。

金属類回収令・金属供出……きんぞくくわいじ

かいじつれい・きんぞくきゅうしゅつ 戦争の長期化に伴い、政府は軍需物資としての鉄、銅を確保するために金属類回収令を昭和16(1941)年9月に発動した。これにより、家庭を含め身の回りの金属製品や金具の回収が実施され、神社、寺院、教会なども例外ではなかった。一部では鉄道の線路まで供出された。戦局が厳しくなると銅や釜までがその対象となった。▼P.34、P.

157「コラム22 金属供出(金属類回収令)」

動労動員……どうろうどういん 戦地に働き手となる男子が送られたため、労働力が不足した農村や工場に14歳以上の男女が動労奉仕する義務が昭和16(1941)年に法制化された。強制的な無償労働で、隣組や学校などを通して実施された。▼P.37

空襲警報……くうしゅうけいはいほう 敵機の来襲が確実となったときに鳴らすサイレン。戦争末期、爆撃が激しくなるなど、空襲の開始と警報が同時のことも多かった。▼P.131 「コラム18 空襲警報」

軍国主義……ぐんこくしぎ 戦争の勝利や軍事力・軍隊の強化が最重要とされ、政治や経済はもちろんで、教育や文化、生活様式、思想までもが軍事化されている体制。

(軍事)教練……(ぐんさ)けんれん 大正14(1925)年から、中学校以上の学校の授業として陸軍の現役将校によって実施された軍隊の基礎的な訓練。昭和20(1945)年に廃止された。▼P.22

軍需工場……ぐんきょこう 戦争に必要な武器、爆薬、航空機、車両などを製造・加工する工場。

軍属……ぐんぞく 正規軍人ではないが、軍人に準じて戦争遂行のためのさまざまな任務にあたった人の総称。

軍令部……ぐんれいぶ 旧日本海軍で国防計画や、作戦など海軍の軍事的な活動を司った最高機関。これに対して予算や人事など政治的な活動を司るのが海軍省である。

警戒警報……けいがいけいはいほう 敵機の来襲は確実であるがどこを攻撃するかはまだわからないとき、進行方向の地域で鳴らしたサイレン。確実性が高まると空襲警報に切り替わる。

警防団……けいぼうだん 戦時中、地域の消防や防空などのために組織された団体。従来の防護団と消防団が警察署単位に統合された。

憲兵……けんべい 明治時代に創設された、陸軍大臣が管轄する軍直属の軍事警察組織。次第に活動の幅を広げ、反

戦思想家やスパイ容疑者の取り締まり

などに猛威をふるったことで知られる。終戦後はGHQによって解体された。▼P.135 「コラム20 憲兵隊」

五・一五事件、二・二六事件……ごいちご

ごじごけん、ににろくけん 第一次世界大戦後の経済恐慌などの社会不安の元凶を政治家や実業家であるとする青年将校らが首相官邸、警視庁などを襲撃した反乱事件。昭和7(1932)年5月15日と、昭和11(1936)年2月26日におこった。▼P.20

行軍……こうぐん 軍隊が隊列を組んで遠距離を移動、行進すること。

高射砲……こうしやほう 航空機を射撃するための火砲。海軍では「高角砲」と呼んだ。高台や広場に設置されたが、高高度を飛ぶB29に対しては弾が届かなかった。

国賊……こくぞく 戦争や国家に対して批判した人を非難する語。非国民とも言った。こついつた言葉が、戦争に対する異論を許さず、同調する空気を作り出した。

国民学校……こくみんがっこう 昭和16

(1941)年公布の国民学校令により尋常小学校を改称した初等教育機関。皇国民の基礎的訓練が目的と位置づけられた。昭和22(1947)年まで存続。国民学校は1〜6年生、その上に高等小学校に相当する、2年間の高等科もあった。▼P.39

国民服……こくみんふく 国民生活の合理化・簡素化のために常に着るべきものとして、国民服令によって昭和15(1940)年に制定された服のこと。軍服と同系色でなかなか普及せず、昭和19(1944)年ごろになって広く男子に着用されるようになった。▼P.35、P.125 「コラム17 戦時中の衣服」

国家総動員法……こっかそうどういひほう 戦時(事変)に際して「人的及び物的資源」を総動員して使うことができることと定めた法律。昭和13(1938)年4月1日公布、5月5日施行。▼P.32

コリアン 中国産の穀物。乾燥に強く荒地でも良く成長する。戦時中は米の代用品として配給されることがあった。現在はモロコシ、ソルガムなどと呼ばれる。

ゆ

ジーブ 第二次世界大戦中、連合国の軍用車両として広く運用された四輪駆動車。耐久性と走行能力が高く、軍事戦路上でも多大な成果を挙げた。終戦後の日本でも、進駐軍が使用した。
▼ P.158 「コラム23 進駐軍」

支那事変 …… しなじへん 「日中戦争」を参照。

ジフテリア ジフテリア菌によって、主に呼吸器の粘膜が侵される感染症。致死率は高いが、現在は予防接種の普及で減少した。

絨毯爆撃 …… じゅうたんばくげき 絨毯を敷き詰めるように無差別にある地域一帯を爆撃すること。
▼ P.25

出征 …… しゅっせう 軍隊の一員として戦闘が行われている地域に行くこと。広義では軍隊に入ること指す語としても使われた。

手榴弾 …… しゅりゅうだん 素手で投げる小型の爆弾。安全ピンを抜くと一定時間後に爆発するようになっている。「て

人口密集地や軍需工場周辺の建物を強制的に取り壊した。こと。
▼ P.94 「コラム10 強制疎開」

徴兵 …… ちようへい 国民に兵役義務を課して、強制的に軍隊に入隊させる制度。日本では明治6（1873）年の徴兵令発布により実施。基本的には満20歳以上の男子が対象であったが、戦局が悪化するにつれて、徴兵年齢や猶予期間が引き下げられた。
▼ P.103 「コラム12 徴兵猶予と学徒出陣」

徴用 …… ちようよう 戦時中、国民を軍需工場などに強制的に動員し、働かせたこと。

(女子)挺身隊 …… (じよ)ていしんたい 女子勤労挺身隊のこと。戦局悪化による労働力不足を補うために、男子にかわって、一定年齢の未婚の女子を組織した奉仕団体。軍需工場などで働いた。
▼ P.44

DDT アメリカ軍が戦争で混乱した日本の衛生状態改善のために散布した薬品。身体についたシラミなどを退治するためとして、頭から白いDDTの粉末をかけられた人も多かった。

りゅうだん」とも呼ばれる。

傷痕軍人 …… しょうこんじん 戦闘で傷を負った軍人（兵士）のことで、厳密には、軍人恩給法による増加恩給・傷病年金・傷病賜金の受給権有資格者を指す。
▼ P.89 「コラム8 傷痕軍人」

焼夷弾 …… しょういだん 燃えやすい焼夷剤（重油・揮発油など）を入れた爆弾。日本への空襲でアメリカ軍が多量に使用した。焼夷剤の種類によって油脂焼夷弾、エレクトロン焼夷弾、黄燐焼夷弾などがある。
▼ P.26、P.133 「コラム19 焼夷弾」

召集令状(赤紙) …… しょうじゅうじょう(あかかみ) 兵隊を召集するための令状のこと。この紙1枚で国民は指定の期日に兵営に出頭しなければならず、違反すると罰則もあった。令状の色が赤だったので一般に赤紙とも言われた。
▼ P.21

照明弾 …… しょうめいだん 夜間の攻撃、飛行機の離着陸、偵察のために、地上の闇を数秒ないし数分にわたって照らす砲弾。

た。後に有害性が指摘され使われなくなった。

灯火管制 …… とうかかんせい 夜間の敵機の来襲に備え、各家庭で窓や電灯を布などでおおって、戸外に光がもれないようにした統制のこと。
▼ P.35

東京大空襲 …… とうきょうだいくうしゅう 一般に昭和20（1945）年3月10日の空襲を指す。一晩でB29が300機以上来襲、1千500トン以上の焼夷弾を落とし、上野、浅草、深川などの「下町」が焼き尽くされ、約10万人の死者、100万人以上の罹災者が出た。同年5月24、25日に東京の「山の手」を襲った大規模な空襲（東京山の手大空襲）も指す場合がある。
▼ P.27

東京山の手大空襲 …… とうきょうやまのてだいくうしゅう 昭和20（1945）年5月24日、25日の空襲。24日が約560機のB29、投下された焼夷弾は3千600トン余り、25日は約500機、3千300トン余りと記録され、赤坂や青山などの東京の「山の手」（高台）が標的になった。死者は両日をあわせて東京全体で4千人余りとされている。
▼ P.28

進駐軍 …… しんちゅうぐん 日本の敗戦に伴って日本に駐留した占領軍のこと。敗戦の衝撃を少しでもやわらげるため、日本政府は「占領」の語を避け、進駐軍と呼んだ。
▼ P.158 「コラム23 進駐軍」

すいとん 小麦粉を水でこね、汁で煮込んだ食べ物。戦争中食べ物不足し、その応急策として主食の代用として食べるようになった。

接収 …… せつしゅう 個人の所有物などを国家などが強制的に取り上げること。アメリカ軍は、日本を占領統治する際、使用に適した建物を次々に接収した。公共の建物や会社などの大きな施設だけでなく、個人宅なども対象となった。

零戦 …… ぜろせん 零式艦上戦闘機の略称。第二次世界大戦中、日本海軍が主力艦上戦闘機として運用し、特攻機としても使われた。本来は「れいせん」と読んだが、当時から「ぜろせん」とも読まれた。

戦災孤児 …… せんさいこども 戦災で両親を失い、身寄りのなくなった子ども。収容施設も作られたが、終戦後に行き

特攻 …… とうこう 特別に編成して攻撃することを意味し、特に太平洋戦争末期に行われた日本陸海軍による体当たり

2 特攻 …… とうこう 「零生」といわれた。
▼ P.63 「コラム隣組」

隣組 …… となりぐみ 昭和15（1940）年、国民を統制するため従来の町内会活動を基盤に10軒くらしを1単位としてつ

な

ナチス 第一次世界大戦後、ヒトラーを党首としてドイツに台頭した政党。昭和8（1933）年に政権を掌握し、ユダヤ人や共産主義者の迫害といった独裁政治を強行した。ヨーロッパを征服を目指して軍備を拡張し、第二次世界大戦を引き起こしたが、昭和20（1945）年5月のドイツ敗戦とともに崩壊した。

日中戦争 …… にっちゅうせんそう 昭和12

先を失った戦災孤児が駅舎、地下道に集まり社会問題となり、「浮浪児」と呼ばれた。

千人針 …… せんにんはり 戦場での無事を願って、木綿の布に赤い糸で千の結び玉をつくって弾よけのおまじないにしたもの。親族の女性が街頭で道行く女性に協力してもらい出征兵士に贈るのが通例であった。
▼ P.33

ソ連 …… それん ソビエト社会主義共和国連邦の略称。大正6（1917）年に世界最初の社会主義国として建国された。平成3（1991）年の解体によって、連邦を構成していた15の共和国が分離・独立した。

た

大本営 …… だほんえい 戦時中に設置された天皇直属の最高戦争指導本部。

代用食 …… だいようしょく 米や麦などの主食の代わりに食べる食品のこと。特に米の代わりにする芋類、麺類など。

建物疎開 …… たてものそかい 空襲のとき、火災による被害を少なくするために、

（1937）年の盧溝橋事件から日本の敗戦まで続いた日本と中国の戦争。当初は、日中ともに偶発的な軍事衝突に過ぎず戦争ではなく「事変」であるとして、日本では「支那事変」と呼んだ。「支那」は当時の日本での中国の地理的呼称。昭和6（1931）年の満州事変からの一体性を重視する見方もある。
▼ P.23

は

配給制度 …… はいきゅうせいど 統制経済のもとで、特定商品の一定量を、特別の機関や方法によって消費者に公平に売ること。戦時下では物資不足により多くの物資が配給制となった。
▼ P.34、P.107 「コラム14 配給制(配給制度)」

発疹チフス …… ばっしんちふす シラミが媒介となって発症する感染症。戦争や飢饉などの劣悪な環境下で流行することが多く、日本では、太平洋戦争中の昭和18（1943）年から戦後にかけて流行した。

バラック 地震や戦災で家屋が倒壊した際に、ありあわせの資材で作った

簡易住宅を指す。駐屯兵のための簡易な細長い兵舎を指す場合もある。

B17 アメリカのボーイング社が開発した四発重戦略爆撃機。高高度での優れた性能と強い防御力を持ち、ドイツ本土への爆撃に運用され、敗戦に追い込んだ。BはBomber(爆撃機)の略。

B29 アメリカのボーイング社が開発した大型戦略爆撃機。当時、最も長い距離を航行できる爆撃機で、日本の大都市への焼夷弾による絨毯爆撃や、広島、長崎への原子爆弾投下を実行した。BはBomber(爆撃機)の略。▼P.25

引き揚げ …… ひきあげ 日本の敗戦により、外地や海外にいた軍人や民間人が日本に戻ったこと。▼P.50

防空壕 …… ぼうくうこう 空襲の被害を避けるための穴や地下室。各家庭が庭などを利用してつくり、空襲警報が鳴ると避難した。しかし構造が不十分な場合も多く、避難しても内部で死亡することが少なくなかった。▼P.97「コラム11 防空壕」

捕虜 …… ぼりよ 戦争などで敵に捕らえられた人。ジュネーブ条約(赤十字条約)により、人道的な待遇が定められているが、満州などでソ連軍の捕虜になった日本兵や逮捕された民間人は、シベリアなどの過酷な環境下で強制労働に従事させられた(シベリア抑留)。また日本人による捕虜虐待も戦後戦争犯罪として問題になった。▼P.48、P.74「コラム5 ソ連の参戦」

満州事変 …… まんしゅうじへん 昭和6(1931)年9月18日、日本軍が南満州鉄道を爆破した柳条湖事件に端を発した日中の軍事衝突。時の若槻内閣は不拡大方針を採ったにもかかわらず、現地の間東軍はそれを無視して満州地方を占領。翌年には「満州国」を建国する。▼P.23

や
山本五十六 …… やまもといそろく 太平洋戦争開戦時の連合艦隊司令長官。真珠湾攻撃やミッドウエー海戦などを指揮した。昭和18(1943)年ソロン諸島で戦死。

ら
闇市 …… やみいち 物資の統制による正規の配給ルートを通さずに流通する違法な物資を売買する市場。敗戦と同時に都市の駅前などで自然発生的に生まれた。東京では上野や新宿、新橋などに大きな闇市があった。▼P.49

罹災証明 …… りさいしょうめい 空襲で家を焼かれた人たちに発行された証明書。これがあったても日用品の支給は十分にうけられなかった。罹災者の増加により、その救護対策に困った政府は、罹災者の集団疎開を推進した。罹災者が疎開先への切符を買う際にも必要だった。

平和の願いをこめて 2016

— 今、語り継ぐ 戦争の体験 —
港区戦争・戦災体験集 第3集

平成28(2016)年3月31日 発行

発行 港区総務部人権・男女平等参画担当
〒105-8511 港区芝公園一丁目5番25号
電話 03-3578-2111 (代表)

発行番号 27197-6421



港区平和都市宣言
30周年ロゴマーク



区の木 ハナミズキ



区の花 アジサイ



区の花 バラ

協力 (敬称略・五十音順)
アジア歴史資料センター
アド・ミュージアム東京
伊方町(愛媛県)
共同通信社
慶應義塾福澤研究センター
国立公文書館
国立国会図書館
時事通信フォト
しょうけい館
昭和館
誠文堂新光社
知覧特攻平和会館(鹿児島県)
長崎原爆資料館
日本電波塔(東京タワー)
沼津市教育委員会(静岡県)
ピクスタ
広島平和記念資料館
平和祈念展示資料館
別府市(大分県)
港区立港郷土資料館

イラスト
佐々木充彦

監修
都倉武之



平和の願いをこめて
2016

— 今、語り継ぐ 戦争の体験 —
港区戦争・戦災体験集 第3集

